

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

日本文字の歴史

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
山田国語学入門選書3 山田孝雄著 日本文字の歴史 書肆心水
Shoshi-Shinsui.com

日本文字の歴史（国語史・文字篇）

目次

自序
一 緒言
二 文字の意義
三 文字の種類
四 文字の性質上の分類
五 文字の目的と本質
六 日本文字学のしきと
七 神代文字の論
八 漢字の構成と本質
九 漢字の起源と変遷
62	53
41	38
27	22
17	14
11	10

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

十	本邦に伝はつた漢字及び書道の一斑	71
十一	漢字を使用した当初の状況	79
十二	仮名の意義及びその発生	91
十三	発展期の万葉仮名	104
十四	万葉仮名より仮名への概観	160
十五	万葉仮名の字数淘汰	175
十六	万葉仮名の字形の簡単化	197
十七	仮名の確立	211
十八	漢字と仮名との用途	223
十九	山田孝雄略年譜	232

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

日本文字の歴史
（国語史 文字篇）

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

万葉仮名の成立はわが文化史上の重大事件であつて、わが国民は之によつて一般的に国語を記載し、之を永遠に伝ふることを得るに至つたのである。之を以て考ふるに、わが文化史の上から見れば、この万葉仮名の無かつた時代とそれの成立してからの時代との区別を以て大区劃を立つべきものであつて、万葉仮名から今の仮名を生ずるに至つた事の如きはこの二大別した後期のうちに起つた変遷に過ぎない現象であると思ふ。この万葉仮名の成立はわが文字史の源頭をなすものであると共に、万葉仮名そのものはわが仮名の進化の基調をなすものであつて、仮名の変遷はこの基調に基づいて奏せらるゝ歌曲に過ぎないといふべきであらう。それ故に仮名の歴史を論ずる場合に万葉仮名の実体を研究せずして直ちに仮名の論に入るが如きものは、本末を顛倒し源泉を究めずして徒らに末流に彷徨するものといはねばならぬ。今、私は万葉仮名の為に多くの紙数を費したのは決して偶然の事ではないのである。

（本書一六〇頁より引用・書肆心水）

凡例

一、本書の底本は、山田孝雄著『國語史 文字篇』（一九三七年八月十二日発行、刀江書院刊）である。底本は、各巻『國語史（～篇）』という書名の十二巻構成の叢書における第九巻という位置づけであるため、本版では著述内容をより分かりやすく示す書名として『日本文字の歴史』と改題した。

一、本文枠外下段の見出しは、簡潔さを宗として本書発行所が便宜的に附した抽象的なものである（基本的に新仮名遣いで表記）。卷末の略年譜も本書発行所が作成・附録した。

一、底本の漢字は旧字体であるが、これは原則として新字体に置き換えた。但し、新字体と旧字体が一対一対応しないもの（弁々辨辯瓣）は旧字体のままとした。また、(1)底本で旧字体が使われていない漢字（つまり現今的新字体の文字が現今旧字体とされるものとは別の文字として使われている場合）、(2)文脈上旧字体のままでなければならない漢字、この二種にはアステリスク＊をルビとして附し、表記上の扱いを区別した。

一、仮名遣い、送り仮名は底本のままである。ルビ（振り仮名等）も底本のままであるが、若年層読者には難読かとも思われるごく一部のものには、底本で使われていない山括弧「」で括ることにより底本のルビと区別して、その読み仮名を示した（但しこれは便宜的なもので、例えば「加之」の場合、これは「しかのみならず」とも「のみならず」とも読まれていてある）。西暦年の補記も「」で括りルビ表記とした。底本における表記の正誤を判断しかねる場合や誤りを正しかねる場合に、底本原文のままの意味で附する「ママ」のルビは、丸括弧で括り（ママ）と表記した。

一、踊り字の用法は底本の通りとした。但し、(1)底本において行末と行頭に分かれたために踊り字が使用されていないとも判断しうる場合は踊り字に置き換え、(2)その逆に、本書において行末と行頭に分かれた場合は踊り字不使用とした。〈溯る〉〈遡る〉のように底本において表記が揺れているものもそのままに表記した。

自序

日本の文字についての総括的理論及び総括的历史は古来これを試みた人が無い。私は今、仮りにその一端を試みた。この小冊子は以上の事の試みによつて成つたのであるが、（おちそつ）草した為に、不十分の点が少からず存するのである。ことに、これは一般人の読みよいやうにと心がけた為に、繁瑣な例や考証的の記事などは一切省いた。たゞ、読者がこれによつて日本文字についての大観を理論と歴史との上につかみ得られ、漢字が如何にして万葉仮名となり、万葉仮名が如何に淘汰変形せしめられて、仮名といふものが生じて来たかといふことと、漢字の本質と仮名の本質と及び漢字交りの文体が何故にわが国に発達したのかといふことについて考慮せらるゝといふやうになれば、著者の望む所が達せられた事になるのである。

昭和十二年六月一日

山田孝雄

緒　言

— 緒　言 —

今、私は、わが国語史の一部分として文字について論ずることとするが、それに先だちて、文字といふものについての意義とか性質とかといふ方面のことを略説しておかうと思ふ。これは国語史の一部としてのこの小篇には余計な事のやうであるけれど、現今の中學界の様子では、この緒論が頗る必要であると信ずる。それは、何故かといふに、わが国の通用文は、現に見らるゝ通り、漢字と仮名とを混用してゐる。ところが、その漢字も仮名も西洋に現に用ゐてゐる文字とは性質を異にしてゐるものである。それ故に、明治以降の國語学者が西洋文字を主とした文字学を輸入して、わが国語の実際といふものを眼中におかず、ひたすら西洋の通りにしてしまはうと考へ、又は西洋の文字と違ふものは、皆野蛮未開の文字だと頭ごなしにしてゐるといふ有様であるが、それが為にわが国の文字について実際に即した意見といふものは、從来極めて稀であつて、多くは軽佻浮薄の譏を免れな

いものであるといはねばならぬ。さて、又漢字だけについて見ると、これは支那伝來の文字であるから、彼國では古くからその學問が起り、相當に進歩して来たことは事實である。

それ故に、これについては西洋人が何といはうとも、又西洋心醉の徒が何といはうとも漢字の學問が儼然として存在してゐるには相違ない。しかしながら、その漢字の支那で用ゐられてゐるさまとわが國で用ゐられてゐるさまとは頗る趣がちがふのであるから、ただ支那で発達した漢字の學問を移植しただけではわが國の漢字の學問とはならない。その上わ

が國では漢字と仮名とを混用してゐる、この混用の現象は支那には見ることの無いものであるのみならず、わが國で漢字を用ゐる場合には種々の現象があり、又漢字と同じ形をしてしかも日本製のものも少からずある。それ故にわが国にはわが國独特の漢字學が存しなければならない。次にわが國の仮名はこれは支那にも西洋にも無い特殊のものであるが故に、この學問は又別のものである。^(のななづ) 加之、その仮名は単独に用ゐらるゝものではなく漢字と混じて用ゐらるのであるが、かやうな現象は世界に類稀なるものであつて、その混用の現象についてもおのづから一定の見解がなければならぬ。凡そこれら的事は西洋の文字學の直訳的輸入だけでは辨じかぬるものであらう。

上述のやうな訳であるから、わが国にはおのづからわが國の特色ある文字學が成立してゐなければならない筈だのにそれは未だ成立してゐないのである。私は先年改造社の日本文學講座の為に日本文字學概説といふものを掲げたことであつたが、それは先方の与へた

日本独特的漢字學の必要性

仮名は中國にも西洋にも無い特殊のもの
漢字・仮名混用の現象

緒　言

紙数の為に極めて概略に止めなければならなかつた。今もその日本文字学といふものを詳説するわけに行かぬから、やはりこゝにその概略を緒論として加へておくことにする。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

二 文字の意義

文字とは如何なるものをさすかといへば、文明社会の人は誰でも、これが文字といふものだと指示するに躊躇しないであらう。しかし、文字とは如何なるものであるかを説明して見よといふことになれば、それに満足な答を与ふることは容易なわざでは無い。

文字といふものは、普通の説に随つて最も簡単に之をいへば、形のない言語といふものを形のある記号によつてあらはしたものであるといふことが出来るであらう。而してこの文字といふものは文化的の産物の一であつて、之を有するといふ事が文化といふ事象のうちの重要な、又著しい一の特徴である。

抑（よ）も言語は人間が音声の調節によつて思想を発表し、よつて以て意思感情等を交換して、以て社会的生活の要具とするものであるが、それが同時に人間の思想蓄積の用にも供せらるゝものである。かやうな言語を使用するといふことが、人間と動物との境目をなす

文字の意義

条件の大きなものの一つである。かやうな言語の有無が、人間と動物との境目であるが如くに、文字を用ゐるか否かが、人間の社会の文化の程度をあらはすの一の尺度ともなるもので、文字を用ゐると否とによつてその文化の進み方が著しく差異を呈するものである。

普通に、文字は言語の記号であるといふから、文字と言語とはその性質が同じもののやうに考へられ易いけれども、実はそれは必ずしも一致しないものである。言語と文字との差異は言語が聴覚に訴へるものであり、文字は視覚に訴へるものであるといふことに根拠を置くものであつて、二者はこの点に於いて著しく性質を異にするものである。言語も文字も人間の思想の発表、交換、蓄積の目的を達するに用ゐらるゝものではあるが、言語は声音によるものであるからして、それが若し、声音での発表以外に方途の無いものとすると、それの伝達は空間上には極めて局限せらるゝし、時間上には之を直接に聞いた人の記憶してゐる間は必要に応じて再現せしめうるけれども、それとても極めて限られた範囲に止まるものである。文字はこの空間時間の上の制限を受けないもので、その文字は特別に之を失せしむる事情の起らない限り、いつまでも存して、どこまでもその功用を失はず、而して空間的にどこまでも之を伝へうるものであり、時間的にいつまでも之を伝へうるものであるからして、思想感情の発表、交換、蓄積といふ上述の目的を達するには特に最も有力なものである。人間はこの文字といふものを有するが故に、その智識その思想を交換することを得て、且之を蓄積することも自由自在であるが故に、よく複雑な思想をも蓄積

して之を永く保存することが出来るのである。

文字は上述の如くに、人間の智識を交換し、又之を記録するによつて、その文書を交換し流通せしめて、智識を普及せしめうるのみならず、之を永く保存することが出来る。その保存せられた思想が追々に蓄積せられて、人間社会の精神的財産となりて、次々に相続せらるゝからして、世を重ね年代を経るにつれて、それらの蓄積が豊富になり、その文化の程度も亦（また）これが為に次第に上進して、それによりて高度の文化を発達せしむることが出来るのである。若し、文字といふものが生じなかつたら、今日の如き高度の文化は恐らくは起りうべきものではあるまい。

要するに文字と文化とは極めて密接な関係のあるものであつて、文字が智識並（ならひ）に思想上の文化の伝達保存の用をなすことは、物質界に於ける諸（もうもつ）の交通機関や倉庫に似た点があるが、その文化に及ぼす影響と貢献とはそれら交通機関や倉庫の遠く及ばない所である。

文字の種類

三 文字の種類

現今、世界の文明諸国に用ゐる文字を見るに、その著しいものだけでも數が少くない。わが国に用ゐてゐるものでも漢字があり、仮名があるが、その他部分的に用ゐらるゝものとして羅馬字(ローマ字)があり、又汎く算術に用ゐる亜刺比(アラビック)亜数字があり、特殊の教科に用ゐるものに梵字もあり、又朝鮮には從来からの諺文がある。今、ここにあげた各種の文字だけの起源沿革を明かにするとしても、その問題は甚だ大で到底この小篇では説きうるものでは無い。

しかし、一般の文字の種類がわからない時には漢字や仮名の性質もわからないものであるから簡単ながら、ここに大体のことを略説する。

先づ、漢字についていへば、その源は絵画から起つたといふことであり、それが段々に変化して一種の記号となつたのであるが、それが支那以外の民族にも用ゐらるゝに至つたものも少くない。而してさやうに異民族の手にわたつた場合には往々それから脱化した別

種の文字を生ずる。それらを少しきふと、今でも安南に用ゐる安南文字、昔、唐の中頃支那の所謂西域に起つた西夏人の用ゐた西夏文字、唐の末頃支那の北に起つた契丹人の用ゐた契丹文字、宋の中頃から同じく北に起つた女真人の用ゐた女真文字等がある。我が国の仮名もこの系統に属する。これらは、その国その民族の体面上、特殊な文字を用ゐようといふ意識も手伝つてゐたかも知れないが、かやうに特殊の文字として起るのは、その言語の相違が主たる原因であらう。

羅馬字(ローマン)が今わが国に入つてゐるのは英米両国の用ゐる文字であるといふ点が主要な理由をなすものである。これは殆んど二千五百年許(ばかり)前出来たもので、その名の示す如くその昔羅馬国(ローマ共和国)で用ゐた文字である。現今これに普通の字体即ち小字といふものと、冠字(カイダク)と称する字体と「イタリック」といふ字体と三様あるが、その冠字といふのが、羅馬字の根本の姿で、西暦紀元前三世紀頃に羅馬で用ゐたものと、現今用ゐるものと同じであることは羅馬法王宮殿所蔵のスキピオの墓碑に徴してもわかるといはれ、又西暦五世紀頃の羅甸文(ラヂン)の書き物と較べても同じ様であるといはれてゐる。次に今普通に印刷に用ゐられてゐる小字は西暦十四世紀頃の印刷者がそれより四百年許(ばかり)前から用ゐ來た小字を少しく変形したものだといはれてゐる。又「イタリック」といふ傾斜して書く一種の字体は西暦千五百一年にアルダス・マスチウスといふ人の考案に成つたものだといはれてゐる。この羅馬字の源は希臘(ギリシャ)文字から出たものであり、希臘(ギリシャ)文字は又フェニシア文字から出で、それに多少

漢字が異民族の手に渡り別種の文字へと脱化したもの

安南文字

西夏文字

契丹文字

女真文字

仮名もこの系統に属する

ローマ字

エジプト文字

フェニキア文字

ギリシャ文字

ローマ字

という繼承関係の説

18

文字の種類

の変形を施したものであるといふ事は学界周知の事である。そのフェニシア文字は埃及文字に基づくであらうといふ事は、西暦千八百五十九年に仏国（エジプト）学者エマニュエル・ルウェジュといふ人が論証してから一般に信ぜられて来たが、その後又異説がないでも無いが今は略する。

さてその希臘（ギリシャ）文字の源をなしたといはる、埃及（エジプト）文字にも変遷があつて、学者の研究によれば埃及（エジプト）文字の歴史には三度の変化がある。最初にあらはれたのが絵文字であつて、その物の形を描いてその物をあらはしたものであるが、それが第二段に進むとその絵文字を以て、その絵であらはす語の音の一部をあらはす所の音字として取扱ふことになった。その第二段の発達に於いて音字として取扱ふ字母は六百二十字であるといふ。それから後に第三段の変化が起つた。それは本来の絵文字に第二段に起つた音字を添へ、二者組み合せて音と義とを同時に知らせるといふ仕組である。この組合せが約千七百字あるといふことである。以上三段の変化を経て埃及（エジプト）文字の構成が一往完成したらしい。以上は神聖文字と称へらるゝものである。さて、又その後に、その神聖文字を崩した行書の如きものが生じた。これをハイラチックといふ。その後又そのハイラチックを崩した略形のものが生じた。それをデモチックといふ。このデモチックになると、もとの絵文字から出た痕跡も見えぬ程になつてゐる。このデモチックがフェニシア文字の母体であらうといはるものである。

埃及（エジプト）文字と同じく古代の文字で、考古学者の研究によつて学界に知らるゝやうになつた

エジプト文字の変遷

音字

← 絵文字と音字を組み合わせ
← 音と義を同時に知らせる

文字の一種として楔形文字がある。これは西部亜細亜で古代に栄えたアッシリア、バビロニアで用いた文字であつて、主として粘土板をわれくの紙を用ゐるやうにしてそれに字を

劃した為に楔形の直線で劃した形に見ゆるによつて名づけられたものであるが、それにも古代バビロン文字、アッシリア文字、新バビロン文字の三段の変化のあることが証明せられてゐる。しかし、それらの文字はその最も古いと見らるゝ古代バビロン文字で見ても既に記号文字といふべきもので象形文字といふことは出来ない。しかし、その源をなしたと考へられてゐる所のスマルアッカデイアの太古の文字は絵画的の象形文字であつた事が知られて來た。このアッシリア、バビロンの楔形文字が、古代にはその世界の共通文字として栄えたが、ギリシャ×ラテン希臘羅甸の文化に圧倒せられて姿を消したのである。この文字が後世の文字に系統を引くか否かは明かでないが、アラビアアーラビア文字はこれに多少の親縁があるらしい。

以上の大外、東洋で著しいものは印度の梵字インドである。その起源は印度では梵天王の教へたものだといふが、それは一の信仰であつて、必ずしも事実とは思はれぬ。その系統をたどると、やはり羅馬字の親類となるのであらうが、明確な事はわからぬ。しかも、この梵字が源になつて出来た文字が東洋に少くない。そのうち、元の巴思巴文字、今も用ゐる西藏文字、朝鮮の諺文オムゴンなどが著しいものである。なほこの外に、東洋には又満洲文字、蒙古文字がある。これらの源をなすものは回紇文字シキグルであり、回紇文字はシリアル文字に基づくものであり、そのシリアル文字はフェニシア、ヘブリュウ文字等の系統をひくものであるから、こ

楔形文字

梵字
パスピ文字
チベット文字
諺文

満洲文字
蒙古文字
ウイグル文字
シリアル文字
フェニキア文字
ヘブライ文字

文字の種類

れも羅馬字の親類である。
^--^

以上極めて概略に止まるが、世界の文字の源頭をなすものとして確かに知られたものは
支那文字と埃及文字(エジプト)とスメラッカディア文字との三大流があるとすることが出来る。こ
れら源頭をなす三大流の源たる文字相互の間に親縁が在るか無いかといふ問題については
さまざまの意見があるが、今日の学問の程度では決定し難いことであらう。

SAMPLE
Shoshi-Shinstu.com

四 文字の性質上の分類

世界に種類の少くないこの文字をばその性質から観察すると、発生上一の系統に属するものでも性質を著しく異なるやうになつたものが少くない。その性質の差によつて文字を分けて見るといふことは文字研究の一の必要な手段である。然らば文字をば性質によつて如何に分けて見ることが出来るものであるか。これについては、私は先づその源に溯らねばならぬ。

文字は今日では種類も多く性質も種々あるやうであるが、そのはじめは絵画的のものであるといはれてゐる。漢字のはじめを見ても、^{エジプト}埃及文字のはじめを見ても、楔形文字の源を見ても、又上の三者と関係が無いと考へられてゐるクリート島の古代文字にしても、又古代メキシコのマヤ族の文字にしてもいづれも皆同様に絵画的のものであつた。この絵画的のものが文字のはじまりであるといふことは頗る注目すべきことであつて、文字の本質

文字の性質上の分類

が既にここにやどつてゐなければならぬ筈であるといふことに深く留意せねばならぬ。西洋流の文字学者は往々この絵画的文字をば未開野蛮のもののやうにいひけなすけれども、しかし文字の本質がこの絵画的文字に存することないとすれば、この絵画的文字は文字では無いといはねばならぬ。苟くも之を文字と目する以上、そこに文字の本質がやどつてゐるといふ事を深く考へねばならぬ。若しそれに文字の本質がやどつてゐないものならば、それは文字とはいはれない筈である。

文字も言語も人間の意思の表示及び伝達に用ゐるものであるが、今翻つて、人間の意思表示及び伝達に用ゐる方式を顧みると、

- 一、動作、身振等によるもの。これは手真似、身振、頭首の動し方、顔の表情によるもの等をさす。
- 二、音声によるもの。これは原始的の叫聲からして音声に調節を施した言語に及ぶ。
- 三、絵画によるもの。これはその目的たる物象の形を描き、又はその物象の形に多少の記号を加へて意思を表示することもある。
- 四、指示的記号によるもの。これは太古に縄を結ぶことによつて或る事を示したなどが一例である。それには社会的習慣としての一定の約束（極めて広義の）といふものの存在が先決条件として存する。

文字の本質は絵画性に
やどる
人間の意思表示・伝達
の方式

以上の四種が有りうると思ふ。そのうちの第二の音声から発達した言語が最も重きをなすものであるけれども、言語によらずして意思の表示伝達をなし得ることは文明社会でも稀では無いのである。

第三の絵画での意思表示といふものは言語ほど自由ではないけれど、とにかくに意思表示を或る程度まで行つた事は事実である。これが絵画文字の源をなすものであるが、これは元来言語とは別途に発生した方式である。それ故にその絵画から発達した絵文字といふものは、源に溯れば、言語の代表でも奴隸でも無かつた筈のものである。今の文字学者が文字を、言語の奴隸であるとする考へ方は第一歩に於いて既に誤つてゐるのでは無いか。しかしそれらの論は後にゆづることにする。

多くの学者の文字の種類分けとして採用してゐるのはテーロルの分類法である。それには

甲 表意的書き方

一、絵即ち目的物の実形表示

二、絵画的象徴即ち絵を以て抽象的目的を表示するもの

乙 音符的書き方

一、言語の記号

一、綴音の記号

文字の性質上の分類

三、アルファベット的記号

とするのである。甲は形象を手段として言語をあらはすものと見てゐる。乙は音の記号を手段として言語をあらはすものと見てゐる。而して絵画的文字が原始的のもので、アルファベット的記号が最も進歩したものと一般に認めてゐるやうである。しかし、それらは西洋文化中心の一種の迷信にすぎぬ。なほ又上の分類では文字の性質上の種類を尽してゐるとはいはれぬ。たとへば、梵字の如きものは乙の部類には相違ないが、一、二、三のいづれの種類にも入らないものである。何となれば、梵字はその体文といはれるものは各ひがおひ一の綴音の記号といふべきものである。しかしながら、それら体文はカとかサとか、すべてア韻を有する綴音をあらはすのが本体であつて、その他の韻の音をあらはすには、その体文の上にそれ／＼摩多を加へて示すものである。即ちたとへば、カの体文の上にイの摩多を加ふるときは、キの音をあらはす字となり、ウの摩多を加ふるときは、クの音をあらはす字となり、エの摩多を加ふるときはケの音をあらはす字となり、オの摩多を加ふるときは、コの音をあらはす字となる。かやうにして、カの体文とイウエオの摩多との結合によつて、キクケコの字が生ずるといふやうな方式によるものである。これは、その摩多の加はつたものは一綴音の字のやうな風に見ゆるけれど、その文字の原理は頗る巧妙なものであつて、上述のいづれの方式にもあてらるものでは無い。テロルの分類はこの梵字の入るべきと

梵字における体文と摩
多の結合という方式

ころが無いといふ点だけから見ても失敗と評すべきものである。かやうな訳であるから、それらの分類は容易に明確に立て難いものであるといふことがわかるのみならず、乙の第三が果して最も進歩したものかどうかも、遽かに断言しがたいものであらう。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

文字の目的と本質

五 文字の目的と本質

文字の起源を絵画的文字符号にあるとする、上に「寸述べたやうに、文字符号が言語の代表であるとする一般の通説が少しく怪しくなつてくる。即ち絵画で人間の意思の表示をなすことは言語の出来てから後、その代りとして起つた事では無くして、最初から言語と相並んで行はれてゐた事であるから絵画的文字符号として用ゐらるゝに至つても、それは言語を一旦用ひて、さてそれのかはりにそれを記載したものともいはれないし、又それを必ず言語に翻訳しなければ意味がわからぬ訳でも無いであらう。それ故に、文字符号は絵画を以てそのはじめとしたといふことはいひ得ても、その絵画を以て言語の代用を^な為さしめたのが文字符号のはじまりといふことは理論上いふ訳には行かぬ。

しかしながら、現今の姿では文字符号は言語の代表といはねばならぬから現行の通説は事実上、これを認めなければならぬ。然りとすれば、この現今の中の通説のやうに文字符号が言語の代

文字符号が言語「語り」の
代表「代り」であると
する通説への疑問

表となつたのは、本来別途に發達して來たらう所の絵画的文宇を以て、いつの頃かに於いて言語の代表とすべく、妥協を行つた時代が無くてはならぬ訳である。その事情を考へて見ると、次の如き関係にあつたらうと思はるゝ。

意思表示の方法としての言語
意思表示の方法としての絵画 同じく意思を表示するによりて
言語をも代表するものとしての絵画。

ここに考へなければならぬことは、かやうにして生じた絵画的文宇には元來言語とは源を異にして生じた意思表示の一法としての性質と言語の代表としての性質とを併せ有してゐるものであると考へねばならぬことである。而して現今までの多くの学者の考へは、たゞ言語の代表としての性質だけを認めてゐるに止まるものであるといふことは、将来の学者に深い注意を乞はねばならぬ点である。

次に今一つ考へておかねばならぬ事がある。それは何故に言語の代表として絵画的文宇を用ゐなければならぬやうになつたかといふことである。言語が言語としての本来の使命をそれだけで十分に果しうるものであるならば、何も絵画とか文字とかといふものを用ゐないで済んで来てよい筈である。即ちここには言語をば言語の本質又はその本来の使命以上に拡張して使用し、又はそれが音声と聽覚とを所依とするが為に、空間と時間との上に

絵画的文宇を言語〔語り〕の代表〔代り〕とした時代の存在

絵画的文宇の二元性

・言語〔語り〕とは源を異にして生じた意思表示の一法

・言語〔語り〕の代表〔代り〕としての性質

文字の目的と本質

限界を与へらるる所があるから、それらの不十分の点、即ち空間と時間との制限を突破せむが為に、絵画の形象性を借りてこれに寓せむとしたものであらうと思はる。ここに於いて、文字といふものが、たゞの言語以外の性質と使命とを有することが明白になるものである。文字を言語の奴隸だと考へてゐるものは、全然文字の目的と本質とを知らないものだといはねばならぬことは上述の道理で明白に知られねばならぬ。

さてこゝに考へねばならぬことは、絵画と絵画的文
字とは、もとは形が同じであつた事があらう。しかし絵画的文
字となつてくると、それは
もはやただの絵画では無くてやはり文字の性質を有するものでなければならぬ。然らば、
たゞの絵画と絵画的文
字との差はどこにあるか。この分岐点が吾等の研究の出発点となる
べきものである。この分岐点はどこにあるかといふに、それが物の形象を描くといふこと
を目的としたか、それをある觀念の記号としたかの点にある。絵画と絵画的文
字とが分離
して、その形を異にした場合はその形の差で、その区別が認めらるゝけれども、しかし、そ
の認識がその形の差別だけに止まるならば、未だ本質を知つての論であるとは認められぬ。
絵画的文
字といふものが絵画と同じ形である場合に、之をたゞの絵画と認め、若くは絵画
的文
字と認むる所のその差異は、それが物象の描写その事を直接の目的としたものか、若く
はその物象の描写が、意思表示の手段として採用されたかの点によるものであるといはねば
ならぬ。かくの如くにしてその描写の目的、又動機によつて、或は單なる絵画と認められ、

空間・時間の制限を突
破するものとしての絵
画の形象性

絵画と絵画的文
字との
差異

- 形象を描く
- 觀念の記号とする

或は文字と認めらるゝ訳であるが、しかし、それは主観的の問題で客観的には絵画と絵画的
的文字と区別のつかぬ時代もあつたであらう。さりながら、この主観的の差異が文字その
ものの本質をなすものであることに深い注意を要する。

さて、絵画と絵画的文との差がたゞ主観上の差異に止まる間はそれは客観的にはすべ
て絵画と云ふべきもので未だ文字と区別を立つことが出来ぬ。絵画と絵画的文との差
は既に述べた通り、それが物の形象を描くことを目的としたか、それを或る種の記号とし
たかといふことに存するのであらう。(金)若し、それを記号としてくれば、その形は絵画と同
じであつてもそれはもはやたゞの絵画で無くして一種の記号といふべきであらう。而して
それが記号となれば、それは直観に訴ふるに止まらずして思惟に訴へ判断を要求するもの
としてここに文字の性質を發揮してくる。しかも、かく記号となつても、それが必ずしも
言語の代表であるとはいはれぬ。その絵画的記号が視覚上、直観的に言語の媒介を要せず
して直ちに觀念を喚び起すことをする以上、わざくそれを言語に翻訳して、さて後、觀念
を喚び起すといふやうな迂遠な手続をとる必要は無い訳である。この性質はその文字が絵
画から脱化しての後になつてもやはり残り存するものである。漢字では往々、そのよみ方
がわからぬでも、その意味の考へらるものが少からずある。かやうにあるのは、この
場合の漢字が言語の代表といふよりは觀念の代表であるといはねばならぬ。そ
れ故に絵画的文といふものはその本質に於いては言語の代表といふよりは觀念の直接の

絵画が記号となれば直
観に訴えるにとどまら
ず思惟に訴え判断を要
求する（文字の性質を
發揮する）

絵画的文は言語「語
り」の代表といふより
も觀念の直接の代表

文字の目的と本質

代表であるといはねばならぬ。

次には漢字学でいふ所の指事的記号による意思表示の代表も亦 文字の一の源となりうる。この事は数字の如きものに著しく見ゆる。一般に数字と認められてゐるものは明かに数観念の記号的表示であつて、その数をいひあらはす所の言語の代表であるといふことは出来ない。況んやその数をいひあらはす言語の発音の代表では断じて無い。数字を以てその数字に該当する言語の代表であるとか、若くはその数字に該当する言語の発音の代表であるとかいふ者があるならば、その愚たるや、実にはかるべからざるものといはねばならぬ。然るに滔々たる西洋直訳の文字学者は殆どこの迂愚の徒たることを免れうるものは少いであらう。音字が最も進歩した文化的の文字で、原始的の文字が、野蛮未開なものだといふならば、数字といふものは漢字にあれ、羅馬数字にあれ、アラビア数字にあれ、すべて最も野蛮なものであるといはねばならぬ。数字は如何にも原始的の文字ではあるが、決して野蛮なものではない。若し、数字は原始的な野蛮なものであり、音字は最も文化的な進歩的な文字であるといふならば、汽車の時間表とか、政府の予算表決算表などの数字を立てゝ、それを羅馬字なり仮名なりで発音的に綴り、それを以て記載して実地に用ゐてみるがよい。さうしたら、さやうな独よがりの迷夢は一朝にして目覚めるであらう。

以上は文字が言語の代表として妥協を行はない以前に既に生じてゐたと思はる、文字の原始を考へてみたのである。即ちそれは絵画的記号と指事的記号との二つを見るが、その

二が支那文字学に所謂象形、指事の原始的のものであらねばならぬ。ここに至りては私は言語と文字とは元來源を異にしたもので、本来二元であるといふことを力をこめて説かねばならぬ。而して文字の起源を言語の代表にあるといふ意見には賛同し難いといふことをここに再びいふ必要がある。さてこの二元並立の場合について考へれば、二者の本質上の差異が明白になるべき筈である。即ち

言語は声音を手段とする。それは耳によつて受け入れらるるもので、時間的に一延長的のもので、しかも、それは刹那的のものである。これが、永く伝へらるるにはその聽者の記憶による外は無い。

文字は物の面に記した形象を手段とする。それは目によつて受け入れらるるもので、空間的のもので、永久性を有するものである。

さうして、この二元並立時代に於いては、その絵画的文字が、かへつて言語を従属せしめたであらうことは、今日でも言語を知らぬ場合に、絵画を描いて觀念をあらはし、それによつて相手方に己が思想を知らすことが少くないといふ事實に照して考ふれば、思半ばに過ぐるものがあらう。

言語〔語り〕と文字とは元來二元並立

言語〔語り〕と文字の本質的差異

二元並立時代における
絵画的文字の優越性

文字の目的と本質

ここに私は文字といふものについて次の如くに言はうと思ふ。文字といふものは物の面に或る形を以て書きあらはした約束的の記号である。この記号は絵画的のものから起つたものと指事的記号として起つたものとあるが、いづれも形象的観念的のものであることは一致する。さてその絵画から起つたものもたゞ絵画と全く同じであつては文字としての目的を有するものだといふことを確實に示し得ぬ。ここに絵画的の形象ながら、文字として、たゞの絵画と異なることを明かにする為に、一定の形式を以て、一定の観念を示すことを約束せねばならぬことになる。この形式化が、文字としての約束の第一歩を踏み出したものである。指事とても同様である。その指事的記号の上に一定の約束が成立せねば、それを見る人によつて、いろいろの意味に聯想せられ、いろいろの意味に判断せらるゝのではやはり文字の効用をなさぬ。これらはすべて社会的共通の約束が一定してくるといふことを必要とする。これらの社会共通の一定の約束といふことが、文字の本質上重要な点の一である。

しかし、文字がたゞ一定の観念の代表に止まる間は大なる発展をなしうるものではないであらう。然るに、その文字も言語も共に観念の代表として、それの外的表示であるといふ共通点がある上に、言語には外的形像性が無く、客觀的永久性が無いといふ弱点があるから、その弱点を補ふ為に、文字と言語とが協力することになり、文字が言語の代表ともなることになつたのであらう。かやうに文字が言語の代表をもなすに至ると、文字は言語

文字記号の起源は絵画的と指示的とがあるが、いづれも形象的・観念的なもの

社会的共通の約束が一定することの必要

文字も言語（語り）も観念を代表し外的に表示するが、言語には外的形像性が無く、客觀的永久性が無いといふ弱点がある

の有する性質のうち、文字としてあらはしうる諸の点を代表すると共に、その上に文字としての本来の性質をも發揮し、ここに言語の有することの無かつた特色をもあらはし、その勢の進むところ、世界の文化を今日のやうに高度に達せしむるやうに導いたものである。

今、思想を基として、それを言語があらはし、その言語を文字があらはすものと見るときは如何にも言語が主で、文字がそれの従属物であつて、文字が、言語を忠実に写しうるかの如くに考へらるゝ。しかしながら、かやうな場合でも、文字と言語とはどうしても同一になり得ない。言語は口で発し耳に訴ふるものであるが、文字は手で書き目に訴ふるものである。言語は音声を手段とするものであり、文字は点劃を手段とするものである。音声は刹那に消えてしまふが、文字はこれをいつまでも保存しうる性質を有する。音声は高低、強弱、長短等任意に之を発し得るもので、それによつていろいろ情意の変化を示し得るが、文字にはこの性質は全く無い。音声は極めて厳密な意義では全然同一のものを二度出すことが出来るか、どうか疑はしいが、文字は消えざる限り、いつ見ても同じである。このやうに言語と文字とは性質が著しく違ふからして、文字を以て音声の通りに少しも違はず写し出すといふ事は言ふべくして行ふことを得ぬ事柄である。それ故に、言語の発音通りにあらはさなければ、文字としての資格が無いものの様にいふのは無理な事である。

なほ文字そのものの性質を顧みるに、これは先にもいふ通り、社会の共通的約束によりて通用し來り、かくの如くに一定したものであつて、一朝一夕に出来たものでは無い。隨

文字の目的と本質

つて、文字はそれを用ゐる所の民族の歴史、言語の性質又その民族の趣味習慣等が之を決定して行くのであるからして、発音本位の文字を使つてゐる者が優良な種族で、象形的の文字を用ゐてゐる者が劣等な種族だなどといふ一概的な結論は下し難い筈である。

文字の構造には規則的に説明しうる点が少くないものである。しかしながら又上述の如く、文字は歴史的習慣的のものである結果として、その構造組織が必ずしも合理的なものばかりだとはいはれない。朝鮮の諺文の如きは、最初から原理原則を立てゝ造つた著しい例であるが、実用上の文字としてはさやうなものは寧ろ例外である。一般的にいへば、その構成のはじめに、その規則が設けられ、その規則に合せてすべての文字が造られたといふことは無いもので寧ろ自然の推移で生じたといふべきであらう。^(む) 羅馬字や仮名はかやうな経過によつて生じたものと思はるゝ。それ故に、文字構成の方式といふものは、たゞ帰納の結果さういふ解釈を下しうるやうに見ゆるといふに止まるものである。

文字はかく社会に生れ、又社会の力によつて活動をなしてゐるが、永い間にはその或るもののが形を変へ、又は意味を変へるやうになることがある。支那の文字の大部分が象形文字であるといはれ、その象形文字の例として、よく「山」「川」などの文字をあぐるが、その「山」「川」といふ文字の形は、そのままに見て山と川との絵画とは見えない。それ故に、支那の文字も今日では決して純なる象形とは言ひ難い。さうしてそれが「英吉利」^(イギリス)とか「亞米利加」^(アメリカ)とか用ゐるやうになれば、全く音字として用ゐたものであるが、それでもやは

文字は、それを用いる民族の歴史、言語の性質、その民族の趣味習慣等により決定される
文字は歴史的習慣的のものであるため、その構造・組織が合理的であるとは限らない

文字は永い間に形を変えられることがある

り文字たることを失はぬ。

以上の如く、文字はその起源から今日に至るまでは種々雑多な変遷が在つて、随分かはつた性質のものも存在するのであるが、それらはいづれも文字であるには相違ない。ここにそれらすべてに通じて、基礎となつてゐる文字の本質といふものは何であるかといふことを考ふる必要がある。その本質と考へらるゝものには、

一、文字は思想、観念の視覚的、形象的の記号である。

二、文字は思想、観念の記号として一面、言語を代表する。

三、文字は社会共通の約束によつて成立し、又その約束によつて生命を保つものである。

以上、三の要点が今日の文字の本質をなす要素であつて、この三要点を具有することが、文字といふものの本質である。なほその他にもいろいろの点があらうが、それらは寧ろ^(むし)副次的のものである。なほ上の三要点についてもいろいろ説明すべきことがあるけれども、今は略する。

以上、私は少しく長きに失する程、文字の本質論をなしたが、これはわが国の文字に即した文字学、又正当に公平な見地からした文字学といふものが既に成立してゐれば、こゝ

文字の目的と本質

に説く必要の無かつたものである。不幸にして従来さやうなものが世にあらはれてゐない。
さうして世に跋扈してゐる羅馬字ローマ字だけの文字学で、わが国の文字を論じては到底正鵠を得る
筈もない。ここに上述の説をなしたのであるが、上に述べた所はすべて、この篇の基礎と
して必要な事どもある。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

六 日本文字学のしごと

以上は文字一般論であつたが、これから述べようることは日本文字学のしごとである。この日本文字学といふものも未だかつてわが国には説かれないものである。私は今ここにその日本文字学といふものを詳かに述べてゐるわけに行かない。しかし、わが国の文字の歴史を説かうとするこの一小篇はその日本文字学のうちの一部門であるに相違ない。そこで先づ日本文字学といふものが何を為すべきものであるかといふことは、一往説明しておく必要があると信ずる。

日本文字学といふものがあるとすれば、それは漢字と仮名との本質と、それらの漢字と仮名とが、日本の言語文章に対する本質上の関係とを主として究明したものでなければならぬ筈である。それを少しく委しくいへば、日本文字学は何としてもわが国に現に常用文字として用はれてゐる漢字と仮名との二者についての研究が基礎をなすものであることは

明かである。而してこれは先づ漢字は漢字、仮名は仮名として、別々に本質的研究の施さるべきものである。さてその漢字だけについていへば、その研究は支那にもわが国にも相当に進歩してゐるものであつて、これについては専門外の私などの喫^{くわい}を容るる必要もない程であらう。しかしながら我々は漢字を用ひてゐる以上、その漢字の本質について考ふる所なくしてはわが国の文字学といふものが完成したといふことは出来ぬ。ここにわが

日本文字学の立脚地よりして漢字といふものを漢学者支那人などと別に漢字そのものの發生と本質とを認識しておかねばならぬものである。さうしてその本質に対する研究を行つた上で、それがわが国の言語文章と如何なる関係にあるかといふことを考へねばならぬ。

次に仮名についてもその發生と本質との研究を施しこれがわが国の言語文章の上に如何なる關係にあるかといふことを考へねばならぬ。かくて、その漢字と仮名とが各^{おなまか}別々の場合に用ゐらるので無くして二者を併せ用ゐてゐるのであるから、この二者を併せ用ゐる理由とその併用に際して生ずる種々の現象についても考察せねばならぬものであらう。しかも、これらの種々の事情を明確に説明し得るがためには、文字そのものの目的及び本質を知らねばならぬ。その根本の考へ方が少しでもくるへば、末千里の差を結論の上に見ねばならぬものである。それ故に私はその根本的の論に比較的多くの紙数を費したのである。

さてこの小篇は元來歴史の性質を有するものであるから、直ちにわが國での歴史を説くべきものであるけれども、漢字は本来支那に於いて、既に幾多の歴史的経過を経てゐたも

日本文字学独自の立場
からする、漢字の發生
と本質の考察
漢字と日本語表現との
関係の考察
仮名の發生と本質の考
察
漢字仮名併用の理由、
そして併用に伴う現象
の考察

のがわが国に入ったのであるから、その支那での漢字の歴史を略説して、それが、如何なる時期にわが国に入ったかといふ問題からしてはじめて、わが国の漢字の歴史がはじまるものである。さうして漢字が輸入せられた後にその漢字から脱化したのが、仮名であるから、仮名はその後に説くべきものである。然るに、ここにわが国には古来神代文字が有つたといふ説が一部にある。若しそうだとするとわが国の文字学及び文字の歴史はよほど変わるものにならなければならぬ。それ故に私はこれより下の記述を次の四部に分けて次第に叙述することとする。

一、神代文字有無の論

二、漢字の略史とわが国に輸入せられて以後のことども

三、仮名の発生と変遷

四、漢字と仮名との混用

SAMPLE
Shoshi-Shinstu.com